

推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1988



The mystery annual of Japan 1988



1988=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社



1988年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集 定価1700円

昭和63年 5月25日 第1刷発行

編者 日本推理作家協会
発行者 加藤 勝久
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話 東京(945)1111

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1988 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛に願いたします。

ISBN4-06-114530-4 (0) (文2)

1988年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序	中島河太郎	5
聖 ^{きよ} い夜の中で	仁木悦子	9
しあわせ競争	石井竜生・井原まなみ	27
死の代役演技	大谷羊太郎	63
河豚 ^{ふぐ} の記憶	黒川博行	85
列車プラス・ワンの殺人	西村京太郎	115
ころす・の・よ	日下圭介	145
競馬必勝法の殺人	三好 徹	161

歌麿カタロゲ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高橋克彦	一瞬の通過・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 佐野洋	曼珠沙華の夜・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 山崎洋子	未亡人は二度生まれる・ ・ ・ ・ ・ ・ 小池真理子	死者の証明・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 深谷忠記	ピッケルと幽霊・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 長井彬	杜若の札・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 海渡英祐	雨に佇つ人・ かきつばた ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 夏樹静子
385	355	329	293	273	245	221	183

我らが隣人の犯罪・・・・・・・・・・宮部みゆき 405

推理小説・一九八七・・・・・・・・二上洋一 438

SF界一九八七年・・・・・・・・風見 潤 442

受賞リスト・・・・・・・・ 446

デザイン 細谷 巖

写真 稲越 功一

序

日本推理作家協会理事長

中島河太郎

「推理小説代表作選集」の一九八八年版を届ける時期になった。

この選集は日本推理作家協会の前身、探偵作家クラブの設立された昭和二十二年に企画されたものである。

毎年、^{おびただ}夥しい数にのぼる推理小説の短篇の中から、優れた作品を選び抜いて、読者にも喜んでもらい、後世に遺^{のこ}そうという試みであったが、探偵作家クラブ時代は必ずしも選考委員の選出結果通りにならず、一部の幹事や出版社の意向に左右されて、不本意な場合があった。

協会に改組されてからは、選集編集委員会を設け、七人の委員を委嘱し、厳正な選考で臨んでいる。お蔭で読者の支持を得て、今年は第四十八冊の刊行の運びに至った。

約七百篇の中から厳選されたものであるが、老巧、中堅、新人を問わず、多彩で豊富な成果が窺^{うかが}えてたのしい。

推理小説界とSF界の前年度の動向を、二上洋一、風見潤の両氏を煩わして書いて戴い

た。これも読者に喜ばれることだろう。

なおこの「代表作選集」は一九六七年版から、「ミステリー傑作選」と題して、講談社文庫に収録し、一層の普及を計っている。その第十八巻「花には水、死者には愛」は一九八三年版で、四月に刊行されたことをつけ加えておく。

昭和六十三年四月

1988年版推理小說年鑑
推理小說代表作選集

聖い夜の中で

仁木悦子

西の空は、いちめん真つ赤だった。陽が沈むのだ。

ひろむは、「おばちゃん」と呼んでいる女性に手をひかれながら、片側の家々の影がすでにすっぽりと覆いかぶさろうとしている街の通りを、家に向かって歩いていった。おばちゃんがもう片方の手に提げているスーパリーのビニール袋は、ごたごたした食料品でふくらんでいた。

すれ違った二、三人の女の子たちが、

「きいよし、このようる……」

と、はしやいだ声で歌い始めた。

ひろむよりも何歳か年上らしいその子たちは、赤いコートを着込んだり、髪にピンクのリボンをつけたりして、めかしているように見えた。今晚どこかへおよばれに行くのだろうか？

今どきの幼児には珍しく、ひろむは、「およばれ」などという言葉を知っていた。つい三ヵ月前まで一緒に住んでいたおばあちゃんが、そういった言葉をよく使ったのだ。「今夜はクリスマスなのやね。あれはクリスマスの歌や」

おばあちゃんが、ひろむの顔をのぞき込んで、教えるように言った。

教えてもらわなくても、彼はあの歌が何の歌か知っていた。歌詞に少し怪しいところがあるけれど、大体歌うこともできるのだ。

おばあちゃんに連れられて行った小さな石段のある教会で、男の人や女の人がオルガンに合わせてあの歌を歌っていた。オルガンの音と歌声は、教会堂の中の白い壁に響いて、おごそかな、そして何かふわあつとした空気をつくる。彼は、その空気が好きだった。

「クリスマスは、イエス様のお誕生日なんだよ。いつもの日と違う日なんだから、今日は一日いい子でいなければね」

と、おばあちゃんに教わったことが、自然に納得されるような気分だった。

「今日はクリスマスやさかい、きつとママがケーキ買つて来やはるわ。それから、ひろちゃんの好きなおもちゃもね」

太ったおばあちゃんは、黄色い歯を見せて笑った。

——違う。おもちゃはサンタクロースが持つて来てくれるんだ。プレゼントっていうんだ。——

ひろむは、心で思った。が、口に出しては言わなかった。生れて以来ずっとおばあちゃんに育てられてきた彼は、おとなしい夢みがちな子どもだった。おばあちゃん

が、教会付属の幼稚園に入れようとした時も、大勢の活潑な子どもたちになじめなくて、とうとう行かなくなつてしまつた。

おばあちゃんに死なれて、ママの住む、この西のほうの街に引取られて来てからは、いっそう口数の少ない子どもになつた。

ひろむは、この太つたおばあちゃんが嫌いだつた。齒が汚く、息がくさいのが厭だつたし、時々彼にはわからない冗談を言つてけたたましく笑うのが、子ども心に下品なような気がした。しかし彼は、この人に夕飯をつくつてもらつたり、風呂の世話をしてもらわなければならぬ。ママは大抵お昼過ぎまで寝ていて、起き出すとバーマ屋に「セツト」をしに行つたり、三面鏡の前で念入りにお化粧をして、「お勤め」に出かけて行く。ママが帰つて来るのは、夜中過ぎで、その時刻には、ひろむはふとんの中でぐすり眠っているのが常だつた。

ママは、ひろむを引取ることになつた三ヵ月前から、近所に住む一人暮らしのこの人に、夕方から夜八時頃までの間、彼の世話を頼むことにしたのだ。

「来年の春には学校へ行くんだから、いままら保育園でもないし、第一、夜預かってくれる保育園は近くになんかないものね」

と、ママは言つていた。

ひろむはババの顔を憶えていない。でも、おばあちゃん

と一緒にいた東京の家では、小さなつくえの上に写真が飾つてあつたので、ババが、少し長細い顔で、黒いふちの眼鏡をかけていた人だ、ということは知つてゐる。このババは、ひろむが赤ん坊の頃、病気で神様のところに行つてしまつたのだと、おばあちゃんが教えてくれた。おばあちゃんは、ババのお母さんなのだ。

ママが、いつ頃からいなくなつたのか、それも彼は憶えていない。ずっと小さい時のことを思い出してみても、いつもおばあちゃんと二人きりだつたのだ。

「ババが亡くなつてしまつたので、ママは遠くに行つて働いているのよ。ひろむが大きくなつたら、ママに会いに行けるのよ」

おばあちゃんは、たまに思い出したようにそう言つた。時々、うす黄色くてへりが緑色になつた封筒を郵便配達が持つてくることがある。封筒の中には、紙のお金が何枚かはいつていた。

「ママから送つて来たのよ。ママは、ひろむのこと、いつも憶えているのよ」

そう言われても、彼は、ママを懐しいと思つたことはなかった。知らない人を懐しがれるわけがない。おばあちゃんさえてくれれば、彼は満足だつた。

ところが、そのおばあちゃんがなくなつてしまつたのだ。

まだ名残りのせみが鳴いていたある日、ただ一人の友だ

ちのエミちゃんと児童公園で遊んで、家に帰って来ると、おばあちゃんは、トイレの廊下で仰向けに寝ていた。いくら呼んでも起きないので、隣のエミちゃんの家に行つてそのことを話した。

それから何が何だかわからない大騒ぎがあつて、おばあちゃんは姿を消してしまつた。その代わり、知らない女の人が来て、彼を新幹線でいまの街へ連れて来た。この女の人が、ママなのだという事だつた。

彼は、ママのことは、そんなに嫌いではなかつた。お勤めが休みの日には遊園地に連れて行つてくれたり、きれいな服を買ってくれたりした。でもママは、機嫌のいい時とわるい時があり、機嫌のわるい時には、彼をぶつたりした。おばあちゃんのように安心して甘えることはできなかった。

「さ、ご飯の支度するよつてに、テレビでも見て遊んでなはれ」

おばあちゃんは、家に着くと、玄関の格子戸を開けながら言つた。

古ぼけた二間ほどの平屋のこの家は、ひろむを引取るこゝとなつた時、ママが誰かに頼んで借りたもので、この家だけは、おばあちゃんと二人で暮らしていた東京の家とどことなく似ていることが、彼の心をほつとさせるのだった。

終業のベルが鳴つた。

輪転機や裁断機のモーターが、やがて、一つ二つと止まつてゆく。

「今日はここまでにしようや。この何日か忙しかつたが、ピークもそろそろ終りだな」

看守の堀崎が言つた。彼はこの印刷作業場の監督責任者であると同時に、印刷技術の指導員の一人でもあつた。生家が印刷所なので、その関係でこの職場に配属されたのだ。看守としては気楽な人柄で、受刑者たちの間の評判はわるくなかつた。

年末は、街の印刷所は年賀状その他の注文の殺到で多忙をきわめる。そのおりで、刑務所内の印刷場も結構忙しくなる。外部の印刷所の下請けの仕事も引受けているからだ。しかし、このような多忙さは、受刑者たちにとってはむしろ歓迎されているようだった。

年がら年じゅう仕事に追いまぐられるのでは有難くないが、ある時期、短期間の忙しさは、仕事をしたという満足感を生む。単調で変化に乏しい生活の中に、外部の季節感をもち込むことにもなるし、残業は、出所の時に渡してもらえるささやかな貯金の高を増すことにもつながるのだった。

「紙が余ったな。戻しておくか」

堀崎が言った。

「はい」

詐欺で服役中の田黒が、ハトロン紙で包装した大きな直方体の包みを手押し台車に載せようとした。

「あ、わたしやります」

手をさしのべたのは、岩野昌造だった。妻の愛人を殺害し、十二年の刑に服している。

「ああ、岩野にやつてもらおう」

堀崎がうなずいた。紙というものは意外に重量がある。

A4判五千枚の包みなどは、大の男でも二人がかりのことが多いが、もと長距離トラック運転手だった岩野は、体が大きく、腕の力も群を抜いており、大きな印刷用紙の包みの運搬には、きわだった能率のよさをみせるのだった。

つかみどころのないきちつとしたハトロン紙包みを両手で軽々と抱えあげて台車に載せる。その時、岩野の目に鋭い光が走ったのに気づいたものはなかった。

「右手のほうに積むのですか？」

きちんと重ねて積み終り、台車を押して歩き始めながら、さりげなく聞く。

「あ？ いや、この紙は当分使わないと思うから奥のほうへ入れてくれ」

堀崎が先にたつ。

作業場の一方に、仕切壁で簡単に仕切られたコーナーが

ある。コーナーといっても、七、八坪の広さがあって、片側にはシャッターがおりている。

印刷用紙の置き場だった。

製紙会社のトラックが、刑務所構内のべつの場所に、受注した用紙を運んで来ておろす。トラックが帰ってしまったあと、印刷作業場に所属の受刑者たちが、その紙を取りに行き、大型の台車に積んでこのシャッターから運び入れ、このコーナーに収納するのだ。シャッターのかたわらには小さな出入口があり、いまは当然シャッターにもドアにも錠がおりていた。

仕切壁のうしろには、さまざまな印刷用紙の、きっかりした茶色の包みが、見上げる高さまで積み重ねられていた。

「ここですか？ ここは一杯でもうはいりませんが」

岩野が一番奥の壁ぎわまで台車を押して行って振返った。

「はいらない？ そんなはずはないだろう」

堀崎が、つかつかと近寄つてのぞき込んだ。

その瞬間だった。岩野の右手ににぎられた太さ五、六センチの丸棒が、堀崎の背後から打ちおろされた。

ぐわつ、と鈍い音がして、堀崎は、声もたてずにその場に倒れた。

すばやく、その体を、積み上げられた印刷用紙のすき間に押し込む。その時ポケットから抜き取ったのは鍵の束だ

った。奪われることを防止するために、細ひもでポケットの内側につなぎとめてあったのを、岩野は怪力で引きちぎった。

作業場には、かなりの人数がいるが、この場所は、間の仕切壁のためにそっちからは死角になっている。それに、作業場にいる仲間たちは、いまは隅の手洗い場に、油や印刷インキに汚れた手を洗おうと群がっているに違いない。

一日の作業の終るこの時刻こそ、岩野が長い間考え抜いた計画に、最も適切な「時」であった。武器の丸棒は、以前、作業場の模様替えをした日、重い機械類を移動させるコロに使った中の一本で、彼はそれを、印刷用紙の山のすき間に慎重に隠しておいたのだった。滅多に使うことのない、美術印刷用のオフセット用紙の束の間に。

そればかりではない。ここ数年、彼は、生活面でも作業面でも、きわめて真面目に、模範的な受刑者として通して来た。殺人というとくに凶悪な犯罪を犯した長期刑の服役者として、最初は警戒を怠らなかつた刑務所側も、近頃では、とくに彼に注目して監視することはなくなつたかにみえた。

長い長い忍耐の年月であつた。

鍵を開けて、早くも夜の闇に包まれている戸外に出た。

日没の最も早い季節なのだ。

右手には、例の丸棒がにぎりしめられていた。

3

豆ランプだけが灯^{とも}っている。天井の蛍光灯に付属している小さな電球だ。部屋の中の物が、わずかに赤茶色に見える。

その完全ではない闇の中で、ひろむは大きく目を見ひらいていた。

おぼちゃんとは、いつもどおりの時刻になると、彼をバジャマに着替えさせ、ふとんに入れた。そして、しばらくそばについていたが、彼が眠り込んだものとみて、蛍光灯を消し豆ランプだけにして、部屋を出て行った。

しかし、彼は眠っていないかつた。いつもは、ふとんに入られると間もなく眠ってしまうのだが、今夜はどうしても寝つかれず、かといってそういうと怒られるかもしれないので、まぶたを閉じて寝たふりをしていたのだ。

おぼちゃんが、玄關の戸を開け、また閉める音が聞こえた。自分の家へ帰って行ったのだ。

ひろむは大きな目を開けて、しばらくそのまま、丸く灯っている豆ランプを眺めていた。が、やがて、ふとんをまくって起きあがつた。

ママの三面鏡の前から腰かけを引きずって来て、電灯の真下に置き、それにのぼつて下がつているひもを引いた。部屋が明るくなった。